

川原寺の調査

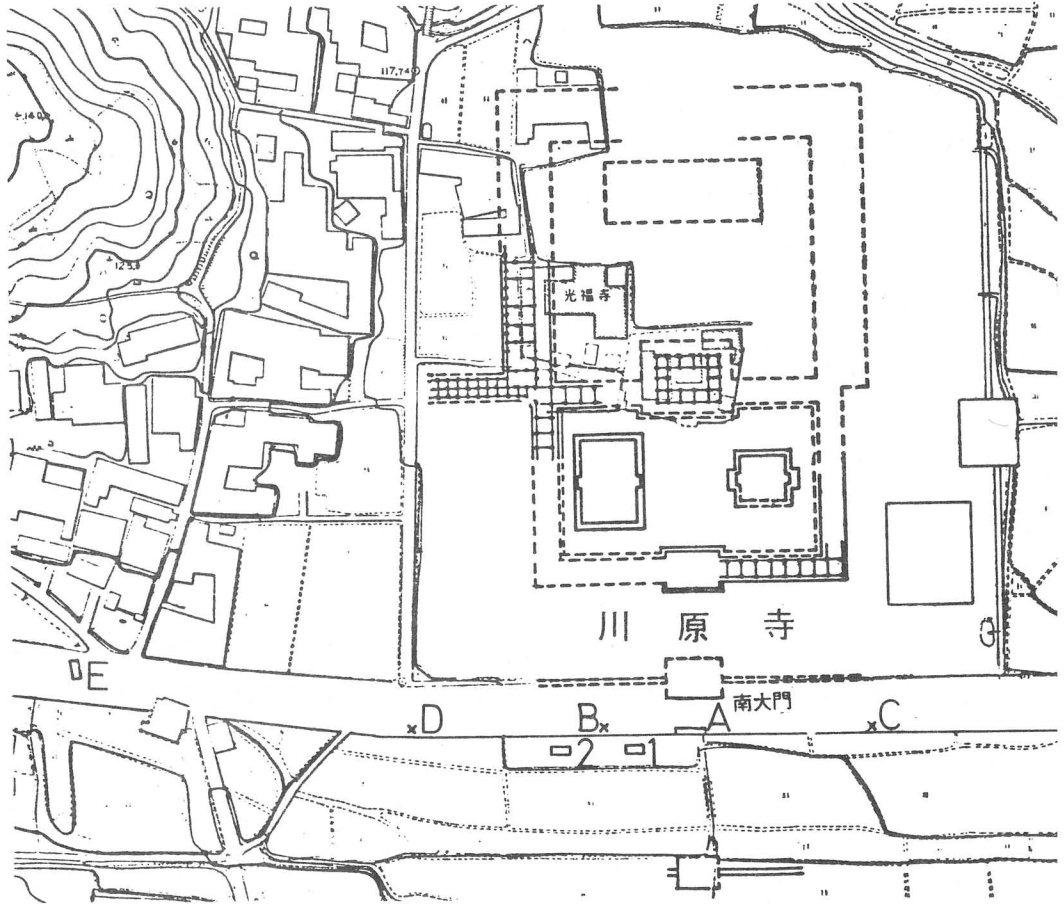
(昭和51年1月)

川原寺跡を東西に横断する県道に敷設される県営水道管理設工事および、県道に南接して設けられる明日香村による降車場造成に関連して実施した事前調査である。

水道管理設工事に関連する調査では、昭和32年の第1次調査で確認した南大門前の玉石敷の参道と、これに直交する東西溝南肩の玉石列を再検出した(A地点)。B地点では、石積みの井戸と思われる遺構を検出した。石積みは玉石を約4段積み重ねているが、大部分は調査地外にあり、全貌は明らかでない。

この他、C・D地点から礎石状の花崗岩2個を発見したが、いずれも造り出しなどの加工は見られず、出土状態からみると旧位置を保つものではないことが判明した。また、寺域外のE地点で石組みの東西溝を検出した。側壁は0.5～1m大の玉石を3段に積んだもので、幅約0.9m、深さ約1mを測る大規模なものである。溝を埋める砂層の状態からみて、相当の流水があったと考えられる。溝内から7世紀代の土師器、須恵器などが出土した。この溝は、あるいは川原寺下層で検出している暗渠に関連する遺構とも考えられる。

なお、この石組み溝と南大門参道の遺構は、工法変更によって保存されることになった。



川原寺調査地点位置図

降車場予定地に設けたトレンチからは、花崗岩礎石1個を検出した。礎石は地山を掘りこんだ掘形に根石を置いて据えており、旧位置を保っている。礎石上面は平らで、造り出しなどはみられない。礎石の周辺からは多量の瓦が出土し、瓦葺きの礎石建物の存在することを示している。この礎石の掘形および前述の井戸状遺構の掘形には、いずれも瓦片が混入していることから、創建時まで遡る遺構ではないと考えられる。

今回の調査によって、従来空白地とされていた寺域南端に、建物などの存在が確認された。これらの遺構の性格については、今後の調査に委ねられる。